

# 新収史料紹介

## 『御産部類記』待賢門院 天治元年（〇一五七一九）

本史料は、天治元年（一一二四）五月二十八日に誕生した通仁親王（鳥羽上皇第二皇子、母は藤原璋子）の御産に関わる諸家の日記を抄出した部類記である。二〇二一年度購入。袋綴一冊（六七丁）、縦二九・二cm×横二一・〇cm。冒頭の朱長方印「藤波家藏書」により藤波家旧蔵と知られる。薄茶の刷毛目文様の表紙は、藤波家の所蔵当時のものと見られる。

天治元年の『御産部類記』には複数の写本が伝わるが、いずれも宮内庁書陵部所蔵伏見宮本『御産部類記』（伏・六一八、鎌倉時代写、以下古写本とする）巻九から派生したものである。現在確認できる写本としては、花園左府記・中右記・忠教卿記・為隆卿記・雅兼卿記・朝隆卿記の六種類の日記の抄出からなる系統と、花園左府記・中右記・忠教卿記・為隆卿記の四種類の日記の抄出からなる系統とがあり、本史料は前者に属する。扉には野宮定基による目録があり、野宮定基本を直接の祖本とすることが知られる。字体、字配り、虫損跡ともに古写本の様態をよく捉えており、近世写本ながら善本といえよう。古写本に元々存在する傍注は墨で、それ以外の注記は朱で書き込みがなされている。朱の注記内容は他の近世写本と共通する部分も多い。特筆すべきは、本史料が現在の伏見宮本の一紙分の欠落箇所を忠実に伝えていると推測される点である（下図）。図書寮叢刊『御産部類記』では該当箇所を宮内庁書陵部所蔵柳原本（柳・五四三）により補っている（上巻一九二頁）が、書写態度を勘案すると、本史料の方がより原本のあり方に近いものと考えられる。失われた古写本の一紙の姿を探る貴重な手掛かりとなるであろう。

また本史料と近い関係にある写本として、東京大学総合図書館所蔵の『御産部類』（G二七・八二八）がある。本奥書および奥書によれば、総合図書館本は、野宮定基本を宝永年中（七年〔一七一〇〕あるいは八年の正月）に久我惟通が書写し、それを宝暦二年（一七五二）に中院通枝が写したものであるという。冒頭には同じく野宮定基による目録が記されている。（小塩 慶）

